

【使徒の働き学び】(68)

「あなたは信じるか、真理のこぼれを。」(使徒 26:24-32)

フェストゥスが大声で言った。「パウロよ、おまえは頭がおかしくなっている。博学がおまえを狂わせている。」……「閣下、私は真実で理にかなったこぼれを話しています。……王様はこれらのことをよくご存知ですの…… 私は率直に申し上げているのです。この事は片隅で起った出来事ではありませんから。…… 王様は預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」するとアグリッパはパウロに「おまえは、わずかな時間で私を説き伏せて、キリスト者にはうとしている。」…… 私が神に願っているのは、あなたはかりでなく、今日私の話を聞いておられる方々が、この鎖は別として、みな私のようになつてくださることです。」

今日の説教箇所は、パウロがアグリッパ王に、敬意をこめて、(か)し堂々と自分の証しを通して、自分が宣べ伝えている復活のキリストを熱意を込めて語りました。それを傍聴していた総督フェストゥスが堪らず、「パウロ、お前は気が狂ったか？ 博学がお前を狂わせている」と叫び、パウロの話しを中断しようとした。このローマ政治家の典型であるフェストゥスは、あのトマスが信じたくても、信じられなかった人でしたが、決して信じようとしていないアリストで、パウロの証しは、彼にとり誇大妄想にすぎないや決めつけてパウロの話しを終わらせようとした。王とパウロとの話し合いを取り持った当人だけに、すいぶん乱暴な発言だった。パウロもそれに反発し、「私は王と話しているのです。しゃまじいて下さい」という気持ちだったのであります。パウロの話し(振り)が余りにも熱を帯びて行くので「博学がおまえ(パウロ)を狂わせた」と言っています。博学は人を狂わせず、むしろ自説にだけ、たわる方が狂わせるものです。僕は「博学」で思い起すのが司馬遼太郎です。彼ほど博覧強読の人は、ないが、た彼ほど「狂」から遠い人は、ないが。その話し(振り)は理路整然としていた。パウロの王に対する話しも熱を帯びて来ますが、事実と事実と話し(て)狂、とはほど遠い。人は自分に都合の悪い事に対して狂っていると止めにかかります。主イエスの行動を狂ったとして止めた来歴のは、母マリヤや主の弟妹たちでした。パウロはあくまで王と話し(て)、「王よ、あなたは聖書の預言者信じておられるはずで、と申しました。これはアグリッパ王にとってジレンマになりました。もし信じないと言えは、エタや民衆の支持を失います。信するや答えれば「モーセやモーテの預言の成就としての、イエス・キリストを信じないわけには行きません。主イエスも、同じ手法を取られました。エルサレム入城の後、神殿で「宮さまめ」と叫んだとき、当局者らが「何の権威でこの事をするのや」と詰問した時、主は「洗礼の王ハネは誰の権威で、その業をたのか」と尋ねました、彼らは、ジレンマに陥り答に窮し、「割りせん」と言ひ、主もまた「それでは、わたしも答えまい」と応じられた。王も答に窮し「おまえは少しばかり話(た)で、私をキリストヤレにするのか」と応(じ)るのが精一杯でした。この「キリストヤン」という語は、私たちが思っている程聖書には出て来ません。この所や、アレキサン教会で信徒がこう呼ばれた(使徒 11:26)と記されているだけですが、(か)し、王が苦しまざれて言った事は、真実でした。パウロは、彼に「イエス・キリストを信じては(か)った。(か)し、それは王が主張するやうに、多くの時間聴いたら信じられると云う時間の量の問題ではなく、パウロは短いけれど、王にとって十分のことを話(て)ました。アグリッパIIは、幼い頃からローマで育つた。云わば幼少時の家康のやうに、人質になつたやうなもので、

政治の世界で弄ばれて育ちある面では苦勞人であった彼は、事情通でもあり、イス・キリストの事実もよく知っていたはずで、パウロが語った事実を真実であると認識できたと思われる。それはパウロが言っているように、世界の隅々で起きた事ではなく、世界の中心で万人が目にしたことであった。そこで、パウロの回心の事実を知れば、それが真理であると十分理解されたはずで、パウロが語ることは、それを信するか否かの二者択一をせまるものであった。聞く者が、王のように大きな者でも、貧しい奴隷（例えばオネシモ）のように小さな者であっても、福音の真理を信じるか、信じないか、常にどちらかを選ばなければならぬ。ピラトに、イスは「あなたはユダヤ人の王か」と尋ねられた時、主は「そうだ」と答えられ、「わたしの国は、この世のものではなく、真理の国の王である」と言われた。「真理に属する者は、みなわたしの声に聞き従う」と答えられると、ピラトは「真理とは何か」と言って、会話を終らせてしまった。ピラトがその続きを尋ねようとしなかったのは、「真理」として何の関心も抱いていなかったからで、その点で、ヘロデ・アンティパスも同じであった。二人は普段仲が悪かったが、このとき真理への無関心で一致していた。そして両者とも「主イエスは無罪であると陰で主張していた。今回でも、フェストゥスとアグリッパ王が真理のことはに対して無関心で、ただ法律的には「パウロは無罪」と認める点では一致していた。やがて、パウロはローマへと護送される。今日の証しと説教はパウロがこの世に残した最後の説教であった。主イエスも、この世で残された最後の対話のことは総督ポルペリウス・ピラトに語った「真理」のことばであった。「ことはか少かるうと多かるうと私が、神に願うことは、王さまばかりでなく、今日私の話しを聞いている人がみな私のようになってくださることです。この鎖は別ですか」と手錠をはめられた手を上げたことではよう。このパウロの最後のすすめは、今日これを讀む一人一人にも響くことばでもあります。主イエスは、「わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に來たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」（ヨハネ・18:37）また、かつて主は、「わたしは道であり、真理であり、いのちのすです。わたしを通して行ければ、だれも又のみもとに來ることはありません」とピリポに言われた。（ヨハネ14:6）古い中国のことばに「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」とある。「芸術は永く、人生は短い」と嘆いた詩人もいた。生涯の中で、真理のことばに出会うのは、一瞬の間であるに違いない。パウロによって提示された「あなたは信じるか、真理のことばを」と、何人の人が真摯に受け入れたのであろう。死んだ」と言ったフェストゥスは、この1年後に病で死んでいる。パウロが去った。数年後にユダヤ戦争が起り、10年の後に、ユダヤ国は滅んだ。アグリッパⅡも妹のベルニケはどんな運命が待ち受けていたのだろうか。7月2日に行く、沖縄の「聖書聖川教会」の當銘由正師は、5歳の時にお父上を戦争で失い、お母上のけんめいな働きの中で育った。貧しい中で唯一の救いは、日本文学を学ぶこと。そして空手や柔道の道に極めることだった。彼は「論語」を学び、正しく生きようと努力した。大学の2年の時、初めて、キリストの言葉「わたしは道であり、真理であり、命である」に出会い、衝激を受け、聖書を初めて読し、救道し、救われた。そして、新島襄の伝記を読み、献身の決心をするのである。彼はそのため、大学を中退し、神学校へ行くことと決めた。初めは教会生活を始めたばかりで、洗礼さえ受けていなかった。那覇の沖縄聖書教会に通い、洗礼を受け、聖契神学校に入学したのは1965年4月で、東京オリエンセックが閉鎖された年でした。當銘先生の短歌がある。「いのち懸け 真理を説きし師の前に 聖徒も答ふ 真心込めて」